牧野富太郎の歩んだ人生と歩いたみち

八柳　修之

1500 種以上もの新種を発見し、40 万点以上の植物標本を採取した「日本植物学の父」牧野富太郎。高知の裕福な商家に生まれ、家業を継がず、植物研究への情熱。東京での学究生活、日本各地を廻っての植物採集。「雑草という草はない」、昭和天皇のお言葉かと思っていたが、牧野の言葉だった。妻、寿衛子の献身的支えを得て、まさに「天真爛漫」な人生を全うした牧野。NHK 朝ドラ、牧野富太郎の生涯を描いた「らんまん」、毎朝、楽しく見た。史実と違うところもあるが脚本家長田育恵が面白くアレンジしている。ウォーキングの HP であるから、牧野が植物採集に出かけた場所も見て行きたい。

先ずは、牧野富太郎（神木隆之介）のスタート。文久 2 年（1862）、土佐国高岡郡佐川村の岸屋という酒造業を営む裕福の家に生まれた。幼くして両親を亡くし、祖母牧野タキ（松阪慶子）に育てられた。10 歳から寺子屋に入り、のちに同村の儒学者伊藤蘭林塾に学ぶ。このころから植物に採取観察を始める。塾では漢学のみならず地理、天文、物理、英語なども学んだ。学制改革により佐川小学校となったが 2 年で中退し、好きな植物採取に明け暮れた。学歴は小学校中退である。15 歳のとき佐川小学校の臨時教師となり 2 年間教鞭をとったが退職。17 歳になると高知師範学校の教師永沼小一郎を通じて欧米の植物学、また「本草網目啓蒙」に接し、本草学、植物学に傾倒する。そして日本中の植物をまとめることに夢を抱き、自分にしかできない仕事だと確信するようになる。

明治 14 年（1881）、富太郎 19 歳。理解のある祖母の許しを得て、高知県佐川から顕微鏡の購入（家一軒分相当の値段）と勧業博覧会見学のため、番頭の息子熊吉（志尊淳）と旅立った。当時、東京へ行くのは外国旅行へ行くようなものであった。高知から初めて汽船に乗り海路神戸に出た。禿山を見て雪が積もっているのかと思った。神戸から京都までは汽車、歩いて大津・水口・土山を経て鈴鹿峠へ出、四日市に出て横浜行きの汽船、横浜から汽車で東京へ。東京では文部省博物局に田中芳男を訪ね知遇を受ける。東京へ来たついでに、5 月、日光に人力車で行き採集。6 月、一週間余りで京都に着くのだが、途中、箱根、伊吹山（1377m）、長浜へ出、琵琶湖を汽船に乗り大津へ出たのち土佐に戻った。

明治 17 年（1884）7 月、二度目の上京、東京大学理学部植物教室を訪ね矢田部良吉教授（要潤）松村任助教授助教（田中哲司）と知りあい教室の出入りを許される。「日本植物志」の編著の志を抱き始める。この年から明治 23 年まで東京と佐川村の間をときどき往復、高知県内、四国各地で植物採取をした。

明治 19 年（1885）24 歳、三度目の上京

明治 20 年(1887) 25 歳、石版印刷屋太田義二（奥田英二）の工場に通って石版印刷術を学び、印刷機まで祖母に無心し購入した。その祖母タキが卒中で 5 月に 77 才で亡くなった。誰もが富太郎が岸屋を継ぐと考えていたが、もとより家業を継ぐ気はなく、番頭として仕えてきた井上と従姉猶（佐久間由衣）を結婚させて岸屋を彼らに譲ることにし、商売には一切かかわらないと決めた。猶を裏切り、郷里に放置した状態に心苦しさはあったはず、と「日本植学の父」著した青山誠は述べている。その後、タキに代わって猶がお金を工面し、富太郎が求めるがまま送金したため、岸屋の経営は傾いていった。猶に譲った酒造業は佐川最大の蔵元の竹村家に買収され、現在は高知を代表する「司牡丹」の蔵元に引き継がれている。

この年、終生の友、川延次郎と染谷徳三郎と「植物学雑誌」を創刊。

明治 21 年（1888）26 歳、「日本植物志図鑑」第一巻第一集を出版。翌明治 22 年、「植物学雑誌」第 3 巻 23 号に東大助教授だった大久保三郎と共に日本では初めての新種ヤマトグサに学名を付す。

明治 23 年（1890）28 歳、5 月 11 日、東京府下小岩村でムジナモを発見。菓子屋の娘、小沢寿衛子を見染め猛烈にアタックし結婚する。

小沢寿衛子と結婚

寿衛子（撮影年齢不詳）

ムジナモ　多年草の水生植物　絶滅危惧植物

牧野が菓子屋の娘寿衛子（浜辺美波）に一目ぼれしたのは、寿衛子 7 歳、牧野 18 歳。（ロリコン？）牧野は酒もたばこも飲まないが菓子は大好物であった。牧野が下宿していた麹町から人力車で本郷の東京大学植物学教室に通う道すがら、小川町の小さな菓子屋の娘を見染め度々通う。10 年も時がたてば可笑しくない。

牧野が結婚したのは明治 23 年（1890）、牧野 28 歳、寿衛子 17 歳のときである。寿衛子の父は小沢という彦根藩士、維新後は陸軍省に勤めた高級官僚。母は元芸者。父の死後、菓子屋を営みながら暮らすようになった。

名実ともに仲人を買って出たのは、神田で石版印刷を営む太田義一（奥田英二）。牧野にとって師匠ともいえる人である。石版印刷は現代のオフセット印刷の元となった印刷方法。この技術を 1 年余りで習得し、牧野は印刷機まで買った。

寿衛子と結婚し牧野にはハッピーと見られたものの、矢田部教授より教室出入りを禁止され、ロシアへの亡命を真剣に考えるようになる。原因は勝手に論文を発表し教授の意に沿わなかったからである。そこで、かねがね牧野の業績を認めてくれていたロシアのマキシモイッチ博士の下で研究することを本気で考えるようになった。しかし、明治 24 年（1891）、マキシモヴィッチ博士が死去したため、訪ロを断念。帝大植物学教室への出入りを禁じられ、尊敬するマキシモヴィッチの下で研究を続ける夢を絶たれていたが、明治 23 年（1890）、新設されたばかりの帝国大学農科大学（駒場、東京教育大学農学部の前身、現在、大学入試センターの場所）の設備や蔵書を利用することが許された。

12 月、岸屋を任せてきた番頭の井上からもうこれ以の送金は無理。今後のこともあるので一度戻ってほしい。という手紙があり家財整理のため帰省。以後、2 年余、妻子をほったらかして高知に滞在。

明治 25 年（1892）郷里の横倉山（標高 800m）、4 億年以上前の山体地質。石鎚山（1982m）その他各地を採取して歩く。9 月、高知県南西部（幡多郡）へ採取に赴く。高知市で西洋音楽会を主宰して活躍するが散財。

明治 26 年（1893）31 歳、長女園子東京にて死亡、さすが富太郎も上京。牧野を大学から追放した矢田部は免職となり、後任の松村任三から復帰させてもらい東京帝国大学理科大学助手を拝命。給与月額 15 円となるも、借金 2,000 円。みかねた土佐出身の田中光顕（学習院院長）、三菱の岩崎家が肩代する。

10 月、岩手県・宮城県　栗駒山（1626m）、高層湿原、高山植物が多い。

明治 29 年（1896）34 歳、10 月、台湾に植物採取のため出張を命ぜられる。台北、新竹付近にて一か月間採取。12 月、台湾より帰朝。東京・キールン間 1800 ㎞。

明治 32 年（1899）37 歳、「新選日本植物図説」を刊行。33 年（1900）「大日本植物志」第一集を刊行。34 年（1901）、「日本羊歯植物図譜」第一巻などを発行

明治 35 年（1902）40 歳、東京でソメイヨシノの苗木を買って、郷里佐川に送り移植。36 年 8 月、北海道、利尻山、別名利尻富士、標高 1721m　登山、高山植物の宝庫

明治 40 年（1907）45 歳、8 月、阿蘇山に採取に赴く。43 年 8 月（1910）48 歳、愛知県伊良湖岬で、採取の帰途、名古屋の旅館で喀血

明治 42 年（1909）47 歳、横浜植物同好会設立され会長となる。44 年、東京植物同好会が設立され、月に一度、日曜日に採取会が催され、以後、全国に同好会が設立される。植物標本が各地から送られてくるようになる。

明治 43 年（1910）48 歳、松村任三教授との確執が続き、助手を免職となる。

明治 45 年（1912）50 歳、1 月、一旦免職となったが、大学内で免職に反対する動きがあり、東京帝国大学理科大学講師として復帰する。2 人の確執は大正 11 年（1922）に松村が退職するまで続いた。

大正 2 年（1913）51 歳、4 月、佐川町の故郷に帰る。「植物学講義」刊行開始、「増訂草木図説」四巻を完成

大正 5 年（1916）54 歳、生活苦から多額の借金を抱えていた富太郎は収集した植物標本 10 万点を海外の研究所に売ることを決意したが、この窮状を朝日新聞で知った神戸の篤志家池長孟が 3 万円で買い取り神戸に記念館を建設し収容、その後も研究費を援助し経済面で支援した。このほか、久原房之介も支援。経済的危機を脱した。

「植物研究雑誌」を創刊。牧野の膨大な借金は植物採取のための旅費のみならず、膨大な書籍の購入であった。蔵書は 45,000 冊。のち高知の植物園付属図書館に収められた。8 月、岡山県新見町方面へ採取に赴く。

大正 8 年（1919）57 歳、北海道産オオヤマザクラ苗 100 本を上野公園に寄贈

大正 9 年（1920）58 歳、吉野山に採取に赴く。

大正 10 年（1921）59 歳、寿衛子、このころ渋谷・荒木山に待合「いまむら」を営む。富太郎と 2 年間別居

大正 12 年（1923）61 歳、9 月 1 日、関東大震災。このとき、寿衛子は渋谷で待合までやり富太郎を経済的に支えていた。標本の一部を失ったため、寿衛子は安全な場所への移転を考え 2 年ばかりして石神井公園付近の大泉に転居。現在、牧野記念植物園となっている。この間、借金逃れのため度々転居したという。

大正 14 年（1925）63 歳、集大成「日本植物総覧」（3205 種収録）初版を発行

昭和 2 年（1927）65 歳、4 月、理学博士の学位を授けられる。秋田県宮川村で採集、青森県下で採集、　12 月、札幌で「マキシモヴィッチ生誕 100 年記念式典に出席し講演、帰途、仙台でのち命名するスエコザサを発見採集。（表面がつるとしていない）

スエコザサ

牧野記念植物園（練馬大泉）

昭和 3 年（1928）66 歳、2 月 23 日、寿衛子夫人没す。享年 55 歳。

牧野は寿衛子との間に 13 人の子を儲け、TV で観られたように献身的に支えたが、自伝において寿衛子のことにはほとんど触れられていない。寿衛子は牧野の研究を守るため一人で謝金取りに対峙し生活費と研究費を捻出するため待合経営までし、苦労の挙句、55 才で亡くなった。借金の原因は植物採取のための旅費と書籍の購入費であった。寿衛子夫人の死後、三女の鶴代が富太郎の面倒を見、牧野の植物採集の旅行に同行している。

3 月、「科属検索日本植物誌」（田中貢一と共著）。7 月より栃木、新潟、兵庫、岩手等 11 県を採集旅行して、11 月に帰京。

昭和 4 年（1929）67 歳、9 月、岩手県早池峰山‘（1917m）高山植物の宝庫。

昭和 5 年（1930）68 歳、8 月、山形県、鳥海山（2236m）　成層火山、日本海から山頂部まで僅か約 15 ㎞。

昭和 6 年（1931）69 歳、4 月、東京で自動車事故に遭い、負傷して入院。6 月、奈良県宝生寺付近を採集。

昭和 7 年（1932）70 歳、 7 月、富士山（3776m）に登山採集。独立峰のため独自の高山植物が多い。

8 月、九州英彦山に採集。翌 8 年、「原色野外植物図譜」（全 4 巻）を完成。

昭和 9 年（1934）72 歳、7 月、奈良県下を採集して歩く。8 月、高知市付近、横倉山、室戸岬、土佐山村、白髭山、魚梁瀬山等に採集に赴く

昭和 10 年（1935）73 歳、NHK 東京放送より「日本の植物」を放送。牧野の名が全国的に知られるようになる。

5 月、伊吹山（滋賀県、標高 1377m）を採集旅行。全山ほぼ石灰岩、植物種が多いことで知られる。

6 月、山梨県西湖付近の採集に赴く。8 月、岡山県下を採集旅行。昭和 11 年（1936）4 月、74 歳、高知県に帰省。7 月、「随筆草木誌」出版。

昭和 12 年（1937）1 月、75 歳、朝日文化賞を受ける。これは 50 年間の研究集大成として「牧野植物学全集」刊行に対し贈られたもの。

昭和 14 年（1939）5 月、78 歳、東京帝国大学理学部講師を辞任（勤続 47 年）

昭和 15 年（1940）8 月、79 歳九州各地を採取旅行。9 月、大分県豊前犬ヶ岳で崖から落ちて重症を負い、別府で静養し、12 月、東京に戻る。

昭和 16 年（1941）、5 月 3 日、満州国のサクラ調査のため、神戸を出帆して、約 5,000 点の標本を採取し 6 月 15 日，門司に帰朝。11 月，安達潮花氏の寄贈により「牧野植物標本館」が建設され池長研究所に置いていた 35 万点の標本が帰る。

昭和 18 年 12 月 8 日、79 歳、太平洋戦争勃発。昭和 20 年（1945）4 月、83 歳、牧野標本館の一部、空襲を受ける。山梨県北郡穂坂村に疎開　終戦。10 月、帰京。

昭和 23 年（1948）86 歳　10 月、皇居に参内して天皇陛下に植物を御進講。

昭和 24 年（1949）87 歳、6 月、大腸カタルで危篤となったが奇跡的に恢復。「植物学雑誌」730 号、米寿記念号

昭和 25 年（1950）88 歳、日本学士院会員に推薦される。

昭和 26 年（1951）89 歳、第 1 回文化功労賞。

昭和 28 年（1953）91 歳、1 月、老人性気管支炎で重態となったが恢復。10 月 1 日、東京都名誉都民　12 月、感冒より肺炎となり臥床静養。

昭和 30 年（1955）4 月、前年暮れより臥床のままで 93 回目の誕生日を迎える。床中で「原色植物図譜」の完成を急ぐ。

昭和 31 年（1956）94 歳、夏、重態に陥り、一時は危篤状態になったが、もちなおす。

昭和 32 年（1957）95 歳、1 月 18 日没。破天荒な人生であった。没後、文化勲章を授与された。

富太郎の一生は、裏の面からみれば金遣いがアライ、借金はする、家を空ける、女癖が悪いであった。朝ドラでは触れられない面があった。　完

参考図書：

日本植物学の父　牧野富太郎　青山誠著　角川文庫

牧野富太郎自叙伝　講談社学術文庫

牧野富太郎と山　牧野富太郎　山と渓谷社

牧野富太郎と寿衛　牧野一淳監修（富太郎ひ孫）　四条たか子著　宝島社

出典：牧野富太郎著：「牧野富太郎と山」　ヤマケイ

以上